石仏調査ニュース
ちがさきの石仏
第　15　号

発行
茅ヶ崎市教育委員会
茅ヶ崎市文化資料館
編集協力
文化資料館と活動する会
（民俗行事部会）
連絡先
〒253-0055
茅ヶ崎市中海岸2-2-18
℡:0467-85-1733
e-mail:shiryoukan@city.chigasaki.kanagawa.jp

「石の地蔵さん、よもやま」

塩原　富男

路傍などの石仏の中で、道祖神、庚申塔もさることながら、身近で親しまれ、信仰されている地蔵さん。たずねゆく先の西の方は、いずれゆくであろうわが身、道案内よろしくねがいたい。そこで地蔵さんのことを少々。

一、未敷蓮華（みふれんげ）を持つ地蔵

千ノ川が暗渠から顔を出し、左岸用水と交わるところに、以前は向原橋という橋があった。そこから右岸を西へ向う遊歩道の入口右手、室田二丁目一九に三角の空地があり、そこに文字の道祖神と並んで小さな地蔵がまつられている。他にも「室田橋」の橋石が二つ置かれている。室田橋は、上流の室田通りの千ノ川（今は暗渠）に架かった橋で、これはその名残である。同所の改修工事後も放置されていたが、地域の人々の手で現在地に移され、安住を得ている。橋石の一つには「昭和二年十二月竣成」と刻まれており、架橋の過去を語る、いわば記念碑的存在となっている。

さて、話を地蔵さんにもどす。この像に紀年銘はない。丸彫の立像で、高さ（台石を含む）は49㎝、横幅は16・5㎝、厚みは11㎝である。その像容は童顔というより若者顔のようである。また、持物が特徴的で、典型的な地蔵の持物は右手に錫杖、左手に宝珠であるが、この像は両手で未敷蓮華（つぼみの蓮華）を持っている。

この地蔵さんは元来、道祖神と共に先に述べた室田橋際、上流左岸の空地（現在は住宅地）にまつられており、そこでドンド焼きも行なわれていた。改修工事で一時現在地に移され、再び元の場所に戻されたりしたが、結果的に現在の場所に落ち着くこととなった。ドンド焼きもここの西の水田で一時行なわれていたが、宅地化と家庭菜園への転用により行なわれなくなった。地蔵が蓮華を持つ例は資料などに出ているが数は少ないという。なお付記すれば、室田のドンド焼はこの地域の氏神である八王子神社の南の路傍で行なわれていたが、宅地化などでできなくなっている。

二、あごなし地蔵

浜之郷の龍前院の境内にある石仏の中の一つに、「天保十四年癸卯九月吉辰（一八四三）／隠岐□鬱無地蔵尊口中一切除病昇位心礼拜

現妙不思議有奇瑞」（『茅ヶ崎市史』3、409頁、地蔵23）の刻銘がある地蔵がまつられている。これが「あごなし地蔵」と聞いてはいたが、その由来などの探求は怠っていた。

平成21年9月3日付「ふれあい朝日」（湘南新聞販売株式会社発行）に連載の「湘南歴史快道」（57）に「龍前院のあごなし地蔵」という記事が載っていて、その由来が書かれていた。

記事を要約すると、あごなし地蔵は歯痛を治す地蔵であるという。その起源は、平安時代の歌人小野篁（おのたかむら）（西暦802～852）は遣唐副使に任ぜられ、仮病を使って辞退したが、それが露見し、承和5年（838）に隠岐（現在の島根県）に流された。そこで、島の阿古那（あこな）という娘と恋仲となったが、娘の母親が歯痛で苦しんでいることを知り、地蔵を刻み平癒の祈りをこめて渡した。娘が朝夕祈ると母の歯痛が治った。そして地蔵は「阿古那地蔵」と呼ばれ、歯痛止めの地蔵さんとして信仰されるようになったが、語呂が似ているので「あごなし地蔵」と呼ばれるようになったという。龍前院の地蔵の願主である熊沢氏は、江戸時代の伊勢参りなどでのこの話を聞き、歯痛に苦しむ家族のために建てたのだろうか。歯医者のいない時代「口中一切除病」に込めた「信心」の深さが伝わってくる、と書かれている。

「さもありなん」かと思いながら、この記事を読んだ。ところで「あご」の漢字を手もとの辞典で調べると、頷・頤・顎・顋などがみえるが、刻字の「齶」（歯部24画）は出てこない。そこで「ガク」の読みで探し当てると、「顎」の本字で同意表記とわかった。現今では使われなくなっているようで、遙かむかしの江戸時代が偲ばれた。

記事での刻文の読みは、市史と相違い「隠岐□」の□は「國」の異体字で、「位心」は書体の読み違いだろうか。「信心」という「湘南歴史快道」の読みに納得。

願主については市史に記載はなく、手もとの古いメモには「願主　當郷熊沢氏次女」、歴史快道では「願主　當郷熊沢氏沢女」と読まれている。熊沢氏は当地における旧家であるが、いずれの家系にあたるのであろうか。熊沢の「ツギさん」なのか、「サワさん」なのか。怠けていて現地確認をしていない。

この地蔵さんは、寺の改築などにより旧位置から新庫裡の前の本堂寄りに移され、二体のうち向って左側に安置されている地蔵さんがそうである。

（当館における石仏調査では、「隠岐国齶無地蔵尊口中一切除病□信心礼拝者現妙不思議有奇瑞」「願主當郷熊沢氏沢女」と確認。）

オロチを退治する神と、種類不明の鳥の彫刻―南湖中町、八雲神社―

平野　文明

（八雲神社社殿）

本誌の先号（『石仏新聞』第十四号、二〇一〇年一〇月）で紹介しました本村八王子神社の

オロチを退治するスサノオノミコトとほとんど同じ絵柄の彫刻が、南湖四丁目の八雲神社の社殿にあります。

賽銭箱の前に立って上を見上げると、太い横木の上に、太刀をオロチの口に突っ込んで髪を振り乱したスサノオの彫刻があります（図①）。

（図①）

その後ろからは右手を挙げたクシナダヒメが、「アレー」といった具合にのぞいているのも八王子神社の彫刻と同じです。

神社の社殿にある彫刻のテーマは、その神社に祭られる神々の物語から作られていることが多いようです。八王子神社では、ご祭神が八柱の神で（このことが社名の由来にもなっているのですが）、この神々を生み出したのがスサノオノミコトとその姉、アマテラスオオミカミだったので、（八柱の神々の物語からではなく）古事記・日本書紀にあるあの有名なミコトのオロチ退治の場面を彫刻して置いてあるのだと先号で述べました。

そこで、今回のクイズです。八雲神社にもミコトのオロチ退治の彫刻があるのはなぜでしょう？

わかった人は手をあげ・・・、オット、半分の方が手をあげましたね。早いですね。さすがですね。そうです、答えは八雲神社のご祭神がスサノオノミコトだからなんですね。祭神と彫刻の絵柄の関係は八王子神社の場合よりもストレートですね。

ならば、次のクイズです。なぜ八雲神社のご祭神はスサノオノミコトなのでしょうか？

オー、今度は手をあげた人が少ないですね。

今は八雲神社と名前がついていますが、江戸時代には「天王社」であったと『新編相模国風土記稿』の茅ヶ崎村のところに書いてあります。だから、神社のある小高い砂山を地元では「天王山」と呼ぶようです。（『南湖郷土史』平成七年市教育委員会刊　一二九頁）

天王社では、どこでも、仏教にもとづく「牛頭天王（ごずてんのう）」をお祭りしました。ところが、一八六八年（慶応四年・明治元年）三月二八日、政府は、牛頭天王は仏教上の神霊だから神社で祭ってはいけないという命令を出します。有名な神仏分離令です。祭るなら仏教として祭れというわけです。

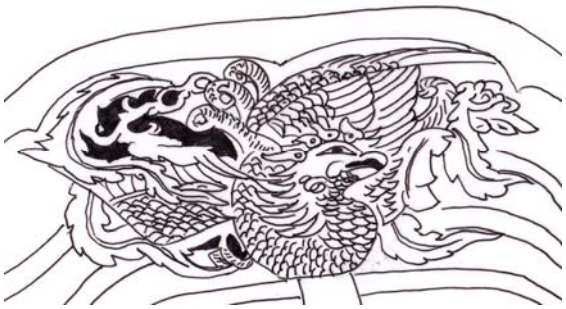
地元では天王社を寺にすることをせず、祭神をスサノオノミコトに、名前を「八雲神社」と変え、神社として歩む道をとりました。

全国の天王社の元締めのような存在だった京都の祇園天神も、祭神を牛頭天王からスサノオノミコトに、社名を八坂神社と変えました。祇園天神に並ぶ勢力をもっていた愛知県津島市にある津島神社も同じような経過をたどって今にあるそうです。

記紀に登場する神々は数多いにもかかわらず、牛頭天王をスサノオノミコトに対応させたのはどのようないきさつによるものなのか、私はまだ知りません。荒ぶる神のスサノオと、祭ることを怠るとすぐに祟（たた）りをなす牛頭天王の性格に共通性を認めたためか、と思うのですがこの辺をきちんと解説したものがあれば、お教えを頂きたい。お願いします。

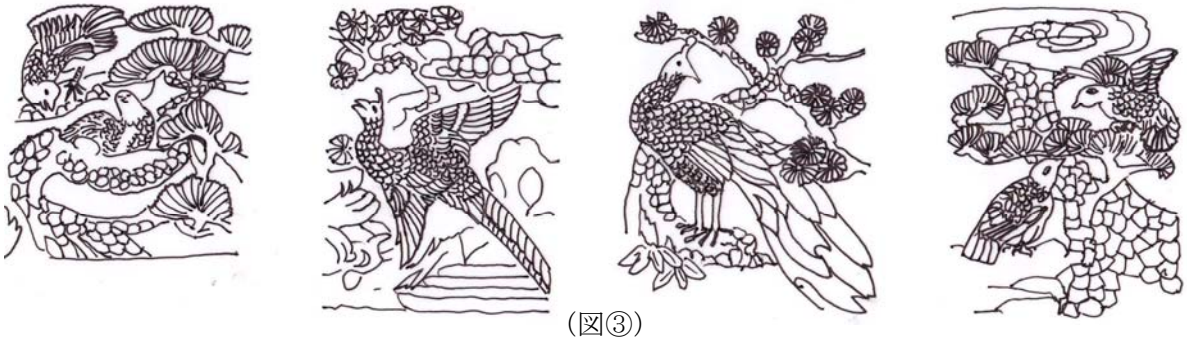
わからないことを抱えながら、このような文章を書き進めることは僭越に過ぎると承知はしているのですが、八雲神社の彫刻の中に、数種の鳥たちが彫られていることも、どのような理由によるものなのか、わからないことの一つです。

鳥の彫刻は三カ所にあります。その一つは社殿の正面、向拝（こうはい・ごはい）の唐破風（からはふ）の中にあります（図②）。社前に立って見上げると、むくりがあって丸く盛り上がった屋根の下に見えますよ。この鳥は鳳凰（ほうおう）でしょう。悠々と大空を飛んでいるおもむきです。なぜここに鳳凰をもってきたのかについては、社殿の正面のよく目立つ高い位置に霊鳥の王様を飾ったというのが、その理由なのかなと私は思うのです。



（図②）

その二つ目は、向拝の板の階段を上がって、拝殿に入るところに立つ唐戸にあります。この唐戸は四つ折りの折り戸になっているようですが、その一枚一枚に彫刻がはめ込んであって、合わせて六羽の鳥がいます（図③）。内側二枚は孔雀（クジャク）でしょう。向かって右はオスで松の根元に立ち、左はメスで飛んでいます。孔雀の両側には、孔雀ではない鳥がそれぞれ二羽ずついます。でもこの四羽の鳥が何なのかがわからないのです。同種なのか、あるいは左右で種類が違うのかも判断がつきません。右の二羽は尾が短いので雷鳥、左の二羽は鳩かと思うのですが、仮にそうだとしても、なぜに孔雀に雷鳥に鳩なのか。



（図③）

祭る神様のお使いとして、熊野神社では烏（からす）、八幡神社では鳩が知られています。雷鳥をインターネットで検索しましたところ、埼玉県内のいくつかの御嶽神社で「天神雷鳥」を彫刻しているようです。この霊鳥は「胴体は雷鳥、首から上と足は鶴というお姿」なのだそうです。もちろん八雲神社の唐戸にある雷鳥らしき鳥は天神雷鳥ではありません。

その三つ目は拝殿両脇、縁の突き当たりにある脇障子（わきしょうじ）にあります（図④⑤）。向かって右側は飛んでいる姿で一羽、左側は松の幹につかまっている一羽と、波の上を飛んでいる小さな鳥二羽です。しかしこれらもまた種

（図④　脇障子　向かって右側）

（図⑤　脇障子　向かって左側）

類がわからない。大きな鳥はくちばしが鋭そうですから鷲、鷹の仲間なのでしょうか。頭の上に特徴がありますが、こんな頭をしている鳥はなんなのか。また、小さな二羽を何とみるか。大きな鳥二羽の子供か。あるいは千鳥か。

合わせて鳥が十羽と鳳凰一羽があります。社殿にある彫刻はご祭神と関係があることが多いと先に述べましたが、どうもこれらの鳥たちはスサノオノミコトと関係はないようです。

社殿は関東大震災で倒壊し、昭和八年三月に完成したと境内に立つ説明板にあります。鳥も含めて、八雲神社社殿の彫刻には作者銘がないようです。作者は（あるいはデザインした人は）どのような考えでここに鳥たちを配置したのでしょうか。

霊鳥の鳳凰はオス、メスがないので、ここには一羽しかないのはうなずけます。そのほかの鳥は孔雀以下すべて二羽一対になっています。これはオスとメスで夫婦をあらわしているのでしょう。とすると脇障子の小さな鳥は千鳥の夫婦とも思えますが、右側の一羽で飛んでいるのをお父さん、左側の松にとまる一羽は、元気よく飛ぶ二羽の子供を見守っているのはお母さんとみることもできるでしょう。夫婦がそろった鳥たちをデザインすることで、円満具足を喜び願う気持ちを表しているのだと思います。八雲神社の氏子の家庭も、いつもこのようにあってほしいという思いがこめられているだと思います。

「うしのごぜん」のこと

金子　栄司

昨年、ある新聞に茅ヶ崎の「うしのごぜん」を書いた。『「うしのごぜん」は何さまなのか、今となっては手掛かりが何も残っていない」と文章の最後をそう締めくくった。その後、家族の友人から「牛御前」に関する資料が送られてきた。こういう反応は大変うれしい。多くの方は、既にその関連にお気付きになっているので改めて紹介する必要もないのだが、折角頂いたので資料のさわりを書いてみました。

資料を下さった方は歌舞伎や落語に精通していて、茅ヶ崎に「うしのごぜん」があるのは、江戸本所「牛御前」の効験が大山に詣でる信徒や旅人達によって伝えられ、祀られる様になったのではないかと・・・。

以下はその資料のいくつかです。

言問通りを横切ると、そこに広い境内を持つ神社がある。本所の総鎮守牛島神社だ。『本所総鎮守牛御前王子権現略縁起』によると貞観２年（８６０）創建の古社。慈覚大師が須佐之男命を郷土の守護神として迎えたのが始まりだという。

もとは、「牛御前社」（天文７年（１５３８）、後奈良院より「牛御前社」との勅号を賜った）といい、明治になってから、今のよび名になった。拝殿前の鳥居の形が特殊で、奈良の三輪山を御神体とする大神（おおみわ）神社と似ている。三輪鳥居と呼ばれるもの。境内には、よだれかけをして寝そべる大きな牛の像があり、通称「撫で牛」といい自分の体の悪いところを撫で、牛のその部分を撫でると治るといわれている。

語り物の古浄瑠璃『牛御前の本地』にこの牛御前の由来が書かれている。

平安時代の武将に源頼光という武将がいた。伝説では大江山の酒呑童子を退治したなどと伝えられ、様々な活躍をした人である。『牛御前の本地』によれば、牛御前は源頼光の弟だという。

母親が北野天神を胎内に宿すという夢を見

た。三年三月を経て生まれたのがこの牛御前だった。丑の年丑の日丑の刻に誕生したので牛御前という。生まれた時から二つの牙が生えそろい、髪は四方に伸び、両目は朝日のように輝き、鬼神の姿を持っていた。そのため父に忌み嫌われ、成長すると乱暴者で、ついには東国に追放されてしまった。

その後、都の武将たちと戦うが味方が次々に減り、ついには主従二人となる。「これまで」と覚悟した牛御前は水に入り十丈（３０ｍ）の牛に姿を変え、都の軍勢を溺死させた。その後も牛御前の念は消えず、長雨を降らせつづけて民衆を悩ました。そこで帝は牛御前を現人神として祀れという勅を出した。今でも「浅草川（隅田川）」に牛の物の怪となって出現するという。

『牛御前伝説』によると、平安時代の武士、源頼光の兄弟に、牛の角、鬼の顔を持つ娘が生まれた。驚いた父、時の将軍多田満仲はこの子を嫌い、須崎という女官に殺害を命じます。娘を哀れに思った女官は娘を救い出し、山中で密かに育てる。娘は凄まじい腕力を持ち、長じて牛御前となった。ふとしたことから牛御前の生存を知った満仲は激怒し、息子頼光に牛御前の始末を命じる。父の裏切りを知った牛御前は恨みの果てに牛鬼となり、逃げ延びた関東で鬼の国を作り、徹底抗戦を続ける覚悟を決める。しかし、頼光と四天王（渡邊綱など）らは関東に追い、牛御前を追い詰める。乱戦の末、牛御前は隅田川に身を投げ身の丈十丈の牛鬼へと変身して辺りを水没させてしまう。そして頼光軍を全滅させた。牛御前が暴れ回ったのは今の浅草の辺り。現在は牛御前社が佇んでいる。

『吾妻鏡』によると、建長２年（１２５１）、北条時頼の時代、武蔵国浅草寺に牛の様な怪異が現れた。寺の中に入り込み、食堂に集まっていた僧５０人のうち怪異を見た２４人が長患いに罹り、起居進退居風を成さなくなった。その内７人の僧は即死したという。

（原文）「三月大、六日丙寅、武蔵国浅草寺如牛者忽然出現、奔走于寺、于時寺僧五十口計食堂之間集会也、見件之怪異廿四人立所受病痾、起居進退不成居風云々、七人即座死云々。」

『新編武蔵風土記稿』にも記述がある。浅草川（隅田川）から牛鬼の様な妖怪が飛び出した。寺を走り回った後、近くの丑御前社に一つの玉が落ちていた。現在、この牛玉は浅草から言問橋を渡った所にある丑御前社（現牛島神社）の社宝となっている。

茅ケ崎の「うしのごぜん」は塚になっていたという記述がある。「うしのごぜん」と呼ばれる人のお墓もしくは供養塚だったのか、はたまた「神様」を祀ったものなのか、明らかにする手掛かりがまったくない。近年この塚の辺りが住宅地になり、いつしか塚も姿を変えていくのだが、その頃から居住者の間に不幸な出来事が続いた。もしや、と思案した自治会や有志の方々によって「うしのごぜん」と刻んだ石塔を建て供養したという。

言伝えによると、塚の辺りには狐が棲んでいて、南湖の魚売りが魚を置かないで通ると化かされるといわれていた。南湖から千ノ川沿いに来て、梅田から高田に抜ける唯一の生活道であるので、魚行商もこの道を行き来していた。道は高田と円蔵の村境を通り赤羽根との接する所で大山道を横切る。

千ノ川をどのように渡ったのか。『新編相模国風土起稿』や『皇国地誌』などによると、川幅２間（３．６ｍ）、深さ１尺５寸（４５㎝）という。川を渡る側に塚が築かれていたのは、川を渡る安全を願ってのことに由来するのか

も知れない。

牛御前の元の場所辺りに、牛頭山弘幅寺がある。開基は小田原城主であった稲葉正則。開山は鉄牛禅師。山号の「牛頭山」は牛嶋神社の祭神である牛頭天王に因むとされる。慈覚大師は牛の多かったこの地に牛頭天王を祀って、悪魔降伏・疫病退散の安全守護としたのかもしれない。茅ヶ崎の「うしのごぜん」もその効験にあやかろうと願ったものなのだろうか。

石仏の部位呼称

平野　文明

一

この小文のテーマは、石仏の各部分をどう呼び分けるかということについて、提案です。

市文化資料館が市民の皆さんと市内の石仏の調査を始めたのは平成八年でした。今は「資料館と活動する会　民俗行事部会」が文化資料館とこの調査を続けており、結果を文章でまとめるところまで来ました。そしてこの作業中に石仏の各部を呼び分けることが必要となりました。

文末に掲げた参考図書は、石仏各部の呼び方について触れているものを管見の限り並べたものです。しかしその大方は、五輪塔・宝篋印塔・宝塔などのいわゆる仏塔（それも古い時代の基本的な形）を取り上げています。私たちが扱っているのは江戸時代からのもので、仏塔以外のものも多く、形も変化を遂げています。またグループの中にもいろいろの考え方があるところから、統一した見解を見いだしたく、ここに試案を提案するものです。大方のご批判をいただければ幸いです。

二

多くの石仏は、成形されたいくつかの石材が積み重ねられてできている。例外として、山梨県内に分布する丸石道祖神のようなものもあるにはあるのだが。丸石道祖神は球型の一石で、それだけで全体である。しかしこれは少数派であり、多数の石仏はそのてっぺんから地面に接する最下部までの間はいろいろの形をしている。「いろいろな形」とは、たとえば屋根のような形であったり、像を刻む石柱であったり、丸彫りの像であったり、直方体であったり、開いた蓮の花びらの形であったりするのである。

様々の形をしている石仏の各部分を「**部位**」と呼ぶことにする。つまり一基の石仏は、いくつかの部位で構成されているということができる。

石仏の調査中、またその結果のまとめ作業中に、私たちは、この「部位」を呼び分けざるを得ないところに至った。なぜかというと、

1　石仏には年号や造立者名や造立した趣旨などの文字（銘という）が刻まれている。記録するにはそれらの文字が石仏のどの部分（どの部位）に刻んであるのかを明確にする必要があるのである。その場合の「どの部分」を示すた

めに、部位を呼び分けなければならないのである。

2　石仏は、作られたときのままの格好で今もある場合もあるが、そうでない場合も多々ある。極端な例は、作られたときのひと揃い（これを「一具」という）が、何らかの出来事で散り散りバラバラとなり、部位の一部だけが迷い石となってそこにあるということもある。このようなときもその一つだけある部位が何であるかを判断しなければならないのである。

3　石仏を採寸するときどこを計るかという問題がある。このとき部位の基本的なあり方を把握し部位ごとに計っておけば、人によって計った場所が違っていたということから免れることができるのである。

石仏の一番中心的な部分（中心的な部位）は「**塔身**」である。この小文では、本誌の紙面の都合と、銘は塔身とそれより下方の部位にあることが多いということから、塔身より上方については触れないことにする。原則論を述べるつもりであるから、実際には、部位が部分的に省略されていたり、述べたこととは違う様相を呈していることがあることを申し添えておきたい。また、イラストは会で報告書用に描いているものを使わせて頂いた。

三　仏教に基づく石仏の場合

1　「座」について　塔身は丸彫りの仏像や高僧像であったり、光背や石柱に彫られた像であったり、六字名号やひげ題目を刻む石柱などであったりする。いずれも貴い存在を表現している部分であるから、これを受ける「座」を備えるのが基本である。仏座にはいろいろがあるが、石仏で最も多く見かけるのは開いた蓮の花の形の**蓮華座（蓮座）**である。

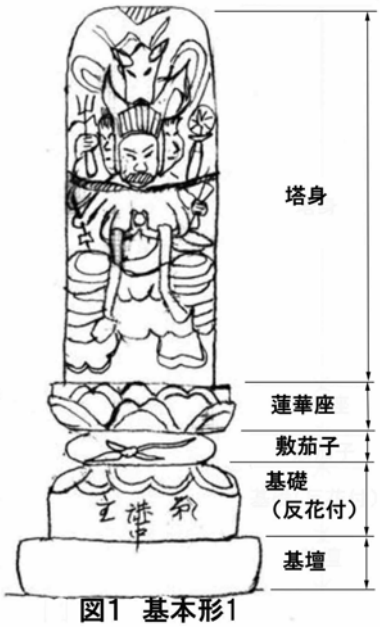


図1　基本形1

弘法大師の坐像は沓と水瓶を彫った直方体の石に乗ることが多い。この石は大師の座と解することができるので、次に記す基礎（特にその（ハ）に外形が似ている。）とはせず、芸が無いがとりあえず「**弘法座**」と呼んでおきたい。

図2　弘法座

2　「基礎」について　蓮華座の下には「**敷茄子**（しきなす）」、さらにその下には**基礎**が置かれている。基礎には反花が刻んであるもの（イ）と、反花を省略した繰形が施されているもの（ロ）と、その両方が省略されてただの直方体のもの（ハ）とがある。

蓮華座はまれに、基礎はほとんどに銘がある。また蓮華座と敷茄子は省略されていることも多く、この場合、塔身の下はすぐ基礎となる（図3）。前記の（ハ）で、線香立てと思われる小穴などが彫ってあるものもある。

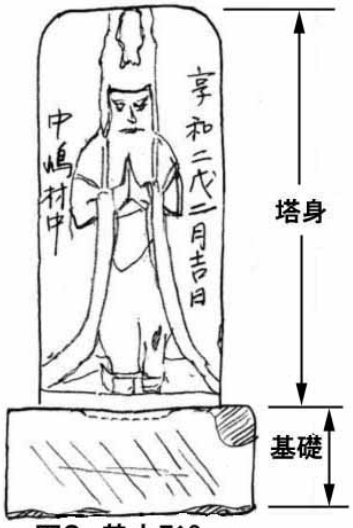


図3　基本形2

3　「竿石」について　市内鶴嶺地区のいくつかの地蔵菩薩には、蓮華座・敷茄子の下に**縦に長い直方体の石**がある。これが地蔵菩薩に特有のことなのかは今ははっきりしない。この石は蓮華座の下、基礎の上にあるので、座とも基礎ともいえない。仮に「竿石」と呼んで独立した部位扱いにしておく。ご意見をいただきたいところである。

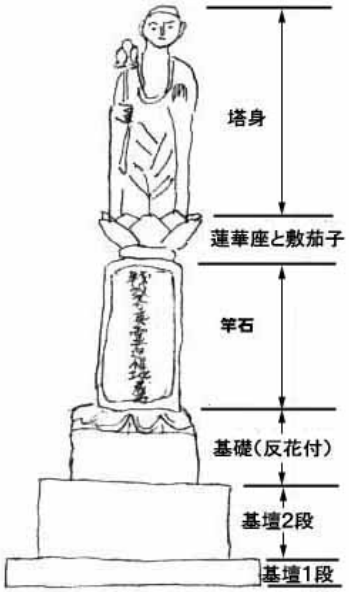


図4　地蔵菩薩の竿石

4　基壇について　基礎の下には基壇がある。基壇は石仏をより立派に見せるために、位置を高いところに置くべく築くものだからどうしてもなければならないというものではないと解説されている（文献③）。多くは切石を二段、三段と積み重ねる。どこを基礎としどこを基壇とするか迷うような場合もある。だからといって基礎と基壇を分けずに扱うとかえって混乱する。基礎と基壇の違いは、前者は石仏を据えるに絶対必要なもので、後者はそうではないところにある。塔身あるいはその座などを受ける一石を**基礎**とし、その下にある石材は何段あっても**基壇**として区別するのである。塔身が直に地面に立っている場合は基礎を失ったのである。

基壇にも銘があるので、数段あるときは呼び分けなければならない。そこで最下段を一として数える。たとえば三段積みの基壇の最上段とその下の段に銘がある場合は「基壇の三段目の銘は・・・、二段目の銘は・・・」と表記したい。

直方体の切石を積んだ基壇のほかに、お城の石垣積みをぐっと小さくした形のように切石や玉石を積んだりモルタルで固めた基壇がある。また、文献③には、壇の本格的構築手法として壇上積というものがあり、「地覆石の上に束石を立て、その間に羽目石をはめ上に葛石を置く。」とあり、文献⑤の一八八頁に唐招提寺金堂のそのイラストが載っている。しかし私たちが調べている石仏には壇上積はあまりない。よく見かけるのはお城の石積みのような基壇であり、それを何と呼ぶかが課題だが、文献②の一三四・一四〇頁に「基壇類別図」が掲載されていてその中に「築石」と「城塁築石」と名付けられた二つの基壇図があり「築石壇」としてまとめられていた。この言葉を借用して私たちはこれを「**築石壇**」と呼びたい。

地面に接する部位は、表面は顔を出しているが半ば埋もれていることが多い。これを「泥板」（文献③、⑥一九頁、⑬一〇二頁）、「苔台」（文献②二二〇頁）、「地覆」（文献⑩五四・六八頁）とする印刷物もあるが、多くの石仏関係図書にならってこれも**基壇**と呼ぶことにしたい。

四

カミ（神）に対する信仰に基づく石仏の場合

5　道祖神や石祠について　これを代表するものに道祖神がある。ほかには厄神、山神、姥神、遠くの有名神社の神々を勧請したもの、また祭

神のおやしろである石祠などがある。石祠内に祭られる尊像がカミ以外であることもあるが、ここで述べることにする。石祠だけ残っているが、中に納められているはずの本体が何なのか分からなくなったり無くなったりしているものも多い。

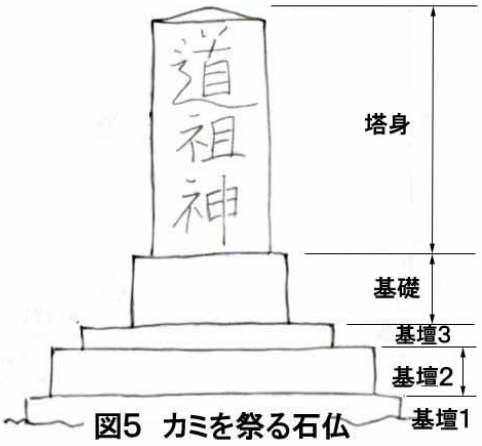


図5　カミを祭る石仏

一番中心となるのはご神体にあたる部分で、前にならってこれを**塔身**とする。石祠ならば箱状の部分である。（仏塔の場合はこれに相当するところを「軸部」とする。）最も大切な部分だからこれを受けるそのすぐ下は「座」となるべきであろうが、仏座に対してこちらにはそれが無い。多くは直方体の切石がある。そこでこれを**基礎**とする。基礎の下に**基壇**があることがあるのは仏教に基づく石仏の場合と同じである。

図6　石祠

五

石仏以外　以上のように石仏という言葉は「仏」とはいいながら「カミ（神）」も含んでいる。私たちは対象は広くとり、信仰にもとづいて奉納された石造物であれば事例として集めている。寺庵仏堂の境内を荘厳するものや、社祠の境内のしつらえ、あるいは何事かを文字で石に刻みつけた碑としての意味を持つものなどである。

6　石灯籠について　その代表は石灯籠である。寺庵仏堂には春日灯籠が、社祠境内には四角型の石灯籠が置かれている。ずっと以前はそうではなかったと思われるのだが、どういう理由によるものか、私たちが普通に目にする範囲では寺には春日、社祠には四角型の石灯籠が多い。春日灯籠の出所といわれる春日大社は神社ではないかなどと茶々をいれるのはよしておこう。**春日灯籠**は蓮の花（請花）のある**中台**で**火袋**を受け、中台の下は筒状の**竿**、竿を**反花付きの基礎**が支える。**基礎の下は基壇**である。

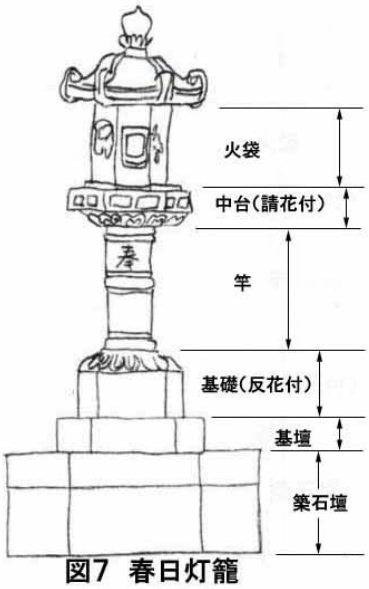


図7　春日灯籠

四角型の石灯籠には請花と反花がない。たまに、内側に湾曲する**四本の足の台**に乗っていることがある。

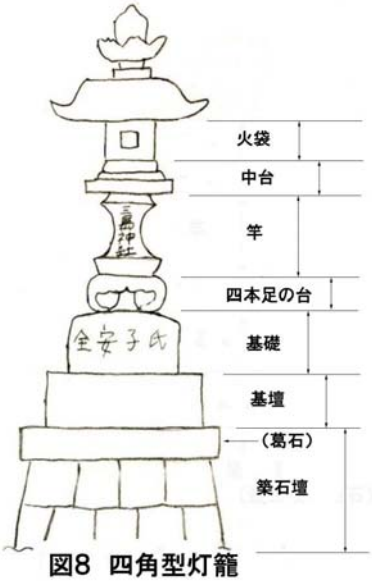


図8　四角型灯籠

7　狛犬について　代表の二番手は社祠境内の狛犬である。山王社では猿の像、稲荷社では狐の像となっているがこれらも狛犬に分類する。

図9　狛犬

狛犬は**石板**の上にかしこまっている。この石板は州浜座の変形であるから座の一種としてここでは仮に「**板状座**」と呼んでおく。しかし、この部分に銘があることは少ないので呼び分ける必要も少ないだろう。板状座の下は直方体の**基礎**で銘はだいたいここに刻んである。そして全体がお城の石垣を小さくしたような築石壇に乗っている。

8　鳥居について　鳥居の銘は額と柱にあることが多いので、部位を呼び分けなければならないことは少ないようだが、地震などで倒れ、折れたりしたものを記念碑などに二次利用したものが結構あり、やはり呼び分けざるを得ないことがある。半ば地中に埋められて全体を支える部分（文献⑤一二六頁のイラストでは亀腹・饅頭・台石としている）を**基礎**とし、順に上にいって**根巻石**、**柱**、**貫**、**島木**、**笠木**と呼ぶ。

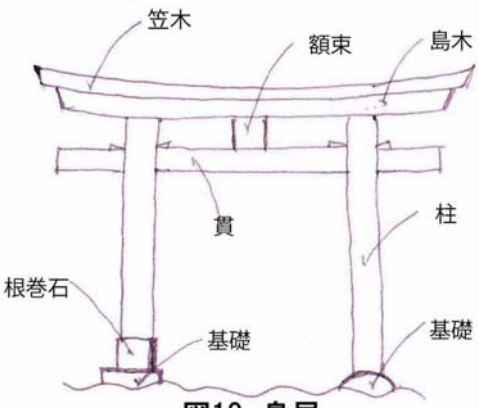


図10　鳥居

これらのほかに社号碑、寺号碑、手洗い石、線香立て、結界石などがあるが、それぞれの部位の呼び分けは、以上記したことをもって援用できるのではないかと思う。

平成二十三年三月二十三日

参考文献

①「関東式宝筐印塔の形式」川勝政太郎著　『鎌倉』四号　昭和三五年　鎌倉文化研究会刊
②山渓文庫三四『性の石神／双体道祖神考』伊藤堅吉著　昭和四二年四版　山と渓谷社刊
③『日本石造美術辞典』川勝政太郎著　東京堂出版　昭和五三年刊
④『石仏調査ハンドブック』庚申懇話会編　雄山閣出版　昭和五六年刊
⑤『図説　歴史散歩事典』山川出版社　昭和五七年刊
⑥『灯籠　手水鉢』川勝政太郎著　誠文堂新光社　昭和五九年刊
⑦『石仏研究ハンドブック』庚申懇話会編　雄山閣出版　昭和六〇年刊
⑧『日本石仏図典』日本石仏協会編　国書刊行会　昭和六一年刊
⑨日本の美術二七九号『狛犬』伊東史朗著　至文堂　昭和六四年刊
⑩箱根町文化財研究紀要第二五号『元箱根石仏・石塔群の調査』箱根町教育委員会　平成五年刊
⑪『日本石仏事典』第二版　庚申懇話会編　平成七年　雄山閣出版刊
⑫『続日本石仏図典』日本石仏協会編　国書刊行会　平成七年刊
⑬文化財探訪クラブ８『石仏と石塔』青木忠雄著　山川出版社　平成一三年刊
⑭『石仏手帳』日本石仏協会　平成一五年刊

市内の石造物（石仏）から（五）

手洗石の文字・文様

加藤　幸一

市内の社寺にある手洗石は、平成十八年時点で六十一基を数える。そのうち明治以降のものが三十四基と、比較的新しい時代のものが多い。

手洗石には、水船（みずぶね）・水鉢（みずばち）・水盤（すいばん）などの別の名もある。

手洗石は、参拝に来た人が身を清めるために手を洗い、口をすすぐための水が満たされている水槽のことで、その形は様々である。

（甘沼八幡大神の手洗石）

拝殿近くにあり、四本や二本の柱に屋根だけの建物の手水舎（水屋）の中に置かれている。中には常に水が溢れ流れていて、水を汲む柄杓が備えられている。

手を洗う水のことを「てみず」と言っていたのが転訛して「ちょうず」となったといわれている。

多くの神社では、拝殿の左側に手水舎が置かれている。なかには、境内や地形の関係から右側に手水舎が置かれているところもある。参拝するときは参道の左側を歩き、参拝したのち時計回りの左側を歩いて戻る。参道の中央は「正中（せいちゅう）」といって神様の道とされている。

手洗石の正面には、奉納・御水鉢・御宝前・水盥・社名・巴・卍など、様々の文字や文様が刻まれている。

一、　三つ巴の文様

神社の手洗石には、特に三つ巴の文様が目につく。巴は鞆（とも）という弓を射るとき左のひじに結びつけた皮製の武具のことである。弦がひじを打つのを防ぎ、また弦の音を高くするのに用いる。この鞆を図案化したものが巴であるという。また、水が渦巻く様子にみえることから龍神信仰とも結びついて、火災が起きたときに巴が水を呼び込むと考えられ、屋根瓦に三つ巴があしらわれるようになった。

（巴）

（とも）

巴の文様は、神紋や家紋にも用いられている。例えば、三つ巴は八幡宮の神紋であり、武士の勢いを象徴しているという。二つ巴は大石内蔵助の家紋である。

（赤羽根神明大神の手洗石）

赤羽根の神明大神の手洗石には三つ巴と「奉納」という文字が刻まれており、水口には龍があしらわれている。この社には治歴元年（一〇六五）、源義家が勧請したという伝説がある。

浜之郷の鶴嶺八幡社にも三つ巴があしらわれた手洗石がある。

二、卍（まんじ）文様

『広辞苑』によると、卍は梵語（古代インドの文語であるサンスクリット語の称）で、功続円満の意で、仏像の胸に描き、吉祥万徳の相とするとある。他にも、「さいわい」「おめでたい」という意味もある。また、太陽が光を発してい

る様を形象化したものともいわれている。

日本では主に仏教において用いられ、吉祥の相としてすべての徳の集まるところとしている。幸福の意味をもった「卍」は寺院の象徴として地図の記号にも用いられている。

（南湖西運寺の手洗石）

萩園の子ノ権現にある手洗石は、卍の文様が陽刻されている珍しいものである。水口の龍は青銅製で精巧につくられている。正面に「子大権現／卍／御廣前／當村子待講中」刻されている。これは江戸時代中頃の手洗石（市内では三番目に古い）で、数多くの人がここで身を清め参拝したことを想像すると、むかしの人と対話しているような思いがする。

浜之郷の鶴嶺八幡社に享保二十年（一七三五）に奉納された卍文様の手洗石がある。これについては次回に紹介します。

（萩園子ノ権現の手洗石）

三、亀の甲に乗った手洗石

海に近い南湖下町に住吉神社がある。その拝殿西側に珍しい手洗石がある。

（南湖住吉神社の手洗石）

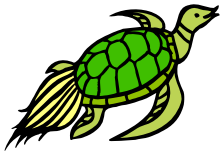
正面中央に三つ巴と「奉納」の刻銘、その上部には雷除けの雷紋文様があしらわれた手洗石が亀の甲に乗せてある。海から陸へ、北向きになっている。大漁祈願のためだろうか。

この手洗石は大漁旗をあげた船のようにもみえてくる。関東大震災後の昭和初期に建立されたもののためか、コンクリートという人造石の手洗石である。

四、長寿を願う亀の文様

十間坂の第六天神社には、拝殿東側に亀を陽刻した手洗石がある。鶴と共に長寿の願いがこめられているのだろうか。

（十間坂第六天神社の手洗石）



（つづく）

茅ケ崎地区石仏再調査レポート

第３～５回

金子　栄司

第３回　平成２２年９月１７日（金）

参加者８名

調査地　円蔵寺・第六天神社・神明宮・路傍

１０：００、円蔵寺集合。女性会員２名は前回調査地、厳島神社の追加調査を済ませて合流。境内を清掃していたご住職にご挨拶、ご了承を頂き調査を開始。当寺には調査対象石仏が多い。さらに、調査対象とする信仰に関わる石造物と景観のために設えられた石造物との仕分けがし難い物がある。とりあえず全てを記録する。層塔の四本脚基礎の中にあった弘法大師像は新製基壇に他の弘法大師と同様個別の覆屋に祀られていた。午後０時を少し回った頃、調査終了。次の調査地、第六天社に向かう。３名帰宅。国道側裏門の寺号碑に気付き、急いでスケッチと採寸を済ます。

第六天神社、到着。昼食を済ませ調査開始。社殿右前の燈籠に「庚申講中」と刻んであり珍しい。第２回調査で大半調査してあるので早々に終了。ここで１名帰宅。神明と路傍の地蔵尊の採寸をして本日の調査完了。

第４回　平成２２年１０月１５日（金）

参加者６名

調査地　金剛院・西運寺・御霊神社・南湖共同墓地・路傍

１０：００金剛院集合。本日の参加は４名であったが、Ｈさんが九州から戻り参加。境内で「これは」という石仏は十一面観音像だと教えられる。日本三大花崗岩産地で石造物生産高トップである岡崎の名工が当寺のために初めて手掛けた十一面観音像（この後拝見する十一面観音金仏との縁？）だという。同時に造ったのが弘法大師童子像で、周囲に「お砂踏み」がある。四国八十八霊場が時計回りに設えてあり、各霊場名の下に現地から集めた土が納めてある。調査が終わりＫさんが帰宅、Ｅさんが加わる。調査の途中、ご住職からお茶をご馳走になる。有難いお話と西蔵渡来十一面観音菩薩像を拝見する。十一面が三層に造られた大変珍しい姿をした金仏。代々の所持者に災いが起こり、故あって当寺に納められたという。造られた年代は一千年余昔らしい。

共同墓地。六地蔵前と稲荷社前に銘のある線香立を発見、採録。墓地西側角に立つ馬頭観音塔、頂部に刻む「・」は四天王を表していると読む。「馬頭観音」と刻んだ両側に文字らしい刻みがある。以前、崩し字と見て読み下したことがあった。Ｈさんから不動明王と愛染明王の種子と教えられる。日蓮曼荼羅に書かれている意匠化した不動明王と愛染明王の梵字と酷似している。崩し字ではなく梵字だったのだ。汗顔の至り。不動明王は生死即涅槃、愛染明王は煩悩即菩提を表しているという。

第５回　平成２２年１１月１９日（金）

参加者８名＋資料館・芦葉

調査地　西運寺・路傍２ヵ所・金刀比羅神社・稲荷社・八雲神社・住吉神社

１０：００西運寺集合。『ちがさきの石仏』１４号「市内の石造物（石仏）から（四）茅ケ崎から越後へ」の記事を見て興味をもたれた、（株）教育ステーション／ワーズワース代表取締役Ｙ氏が見学に参加。参加者が多く短時間で調査を終える。御霊神社の次に路傍二ヵ所、帝釈天像の庚申塔や地蔵像を調査。金刀比羅神社と隣接する稲荷社を調査。八雲神社に向かう途中、路傍の庚申塔に立寄る。１名帰宅。八雲神社境内で昼食。調査が予想以上早く終わりそう

なので芦葉さんに資料館まで住吉神社の調査カードを取りに行ってもらう。楊井氏から八雲神社の狛犬の形態を質問される。正しい呼び方を知らない。石（巌）獅子あるいは獅子山と呼んでいたのを見たことがある。このタイプはつい先日、「江戸（城）巡り」で太田姫神社や神田明神に似た姿の狛犬を見ている。神田明神では「石獅子」と表記して江戸時代に造られた由来などを書いた千代田区の説明板があった。江戸時代のものということで千代田区指定有形民俗文化財になっている。

姥神宮にあった石造物について

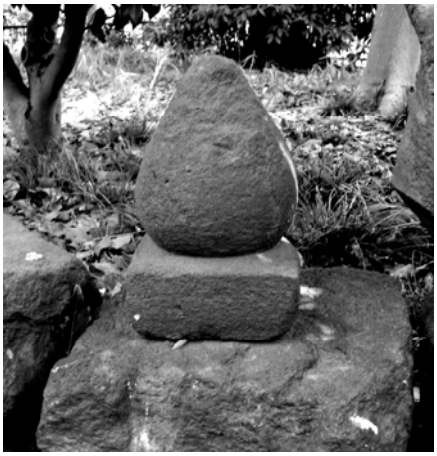
須藤　格

『文化資料館調査研究報告２０』（平成２３年３月発行）にて、「姥島とその信仰について」と題し、調査・論考したものを報告した。姥島に関する信仰を考察する中で、姥神信仰についても触れた。その中で、かつて菱沼３丁目４番付近にあったとされる「姥神宮」の「跡」の写真を紹介した。その写真が、次のものである。

［姥神宮跡：昭和２７年（１９５２）年撮影］

２０１１年４月１５日に行なった小和田・菱沼地区の石仏調査において、小和田の熊野神社に立ち寄った際、興味深いものを発見した。

姥島を詠んだ歌碑の隣に、姥神宮跡の写真に写っている石造物に酷似するものが置かれていることに気付いた。当該地は、民俗調査や社叢林調査等で何度も訪れている場所であるが、これまで全く気付かなかった。



［小和田・熊野神社の石造物］

小和田の熊野神社に祀られている姥神、そして姥島について読んだ歌碑と、「姥」に関する石造物が並べて置かれていることから、この石がかつての「姥神宮」に祀られていた石仏であった可能性は非常に高いと考えられる。

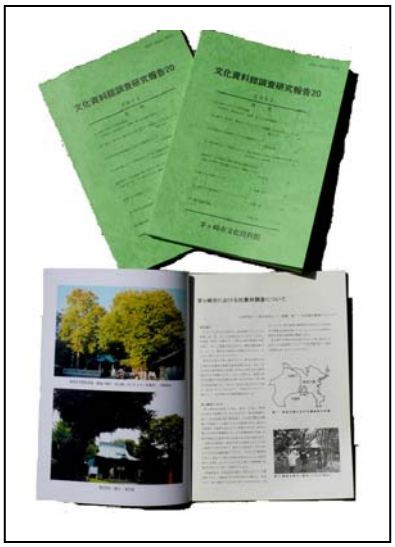
なお、「姥神宮」とは、かつて菱沼３丁目字

長町にあり、地域の人々から「ウバガミ」と呼ばれ、歯の痛みに効用があるとして多くの村人が参詣したと伝えられている。前掲の写真は、菱沼3丁目4番付近を撮影した貴重な写真資料である（水嶋善太郎著『小和田郷土物語』1987年発行　所収）。

菱沼の八王子神社にある石造物が、かつての姥神宮にあったものなのか、ご存知の方がいらっしゃいましたら、文化資料館まで情報をお寄せください。

●┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈┈●

『文化資料館調査研究報告』20
平成23年（2011）3月発行
価格　400円



社会教育課または文化資料館にてお買い求めいただけます。

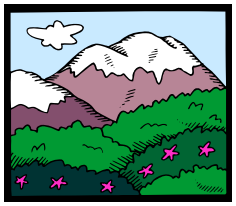
〈正誤表〉

・第十四号一頁
「本村八王子神社の彫刻」（平野文明）
一段目二行目
（誤）「本村三丁目」
（正）「本村四丁目」

〈編集後記〉

足早に桜の季節も過ぎ、新緑の季節となりました。この度、発生した東日本大震災において被災された皆様には、心よりお悔やみ、お見舞い申し上げます。この未曾有の大震災では、文明社会の中で忘れがちだった自然の脅威をまざまざと見せつけられました。一方、今年も変わらず咲き誇る桜を眺めては自然に心癒され、脅威と恩恵という自然の持つ二面性を改めて感じた春となりました。

このような中、今回も多くのご投稿をいただきまして、「ちがさきの石仏」第十五号を発刊するにいたりました。皆様そろっての熱心な執筆に感謝の意を述べさせていただきます。



〈お知らせ〉

茅ヶ崎市文化資料館では、市教育委員会で収蔵している民俗資料を、市民ボランティアの皆様と協力して、調査・整理・保存・展示などの活動を行っています。

その一環として、長年にわたり石仏調査を行ない、市内に点在する石造物一、〇三九点（二〇〇七年三月現在）を把握するにいたりました。現在、作成した調査カードをもとに、採寸項目の見直し、石造物のスケッチ図の作成、銘文内容の再確認等の作業を行っています。

資料の整理は毎週木曜日、また石仏に関するフィールドワークなども実施しています。ご興味のある方は、ぜひご参加ください。

平成二十三年度の調査予定地は、小和田、菱沼、室田、高田、赤羽根、松林、甘沼、香川、下寺尾、行谷、芹沢、堤です。

※ご不明な点等ございましたら、1頁に記載しております連絡先にご連絡ください。なお、本誌はバックナンバーを含めすべて茅ヶ崎市文化資料館のホームページで公開しております。そちらもぜひご利用ください。